

2019年12月3日

立教大学国際学術研究交流制度  
2019年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	文学部・教授
	氏名	野中 健一
受入学部・研究科・研究所		文学部
招へい 研究員	所属・職	Professor, Faculty of Sciences, National Autonomous University of Mexico 所属機関所在国：メキシコ
	氏名	Jose Manuel Pino Moreno
招へい期間		2019年11月1日～2019年11月9日（9日間）
研究経費		352,140 円

2. 滞在中の活動

来日日および離日日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例）〇〇について研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

\*「本学との学術協定（学部間・研究所等間を含む）の締結または既存協定の維持・強化に資する活動」を行った場合は、該当する活動内容に※を付してください。

年月日	活動内容
2019年11月1日	11月1日～3日まで、日本での昆虫食文化・昆虫利用のさかんな中部地方において、現場視察と参与調査を実施した。
2019年11月4日	立教大学にてメキシコの昆虫食に関する講演をし、メキシコの環境・文化の多様性の中にみられる545種類の食用昆虫とその分布、料理、経済的利用と地域発展の可能性について発表し、その後現物も用いて参加者と活発な討論を行った。連日、昆虫食や文化生態・資源利用に関心をもつ研究者らと活発な討論を行った。（参加者14名）
2019年11月8日	今回の来日で得られた知見も踏まえて、民族昆虫学を複合的に実証的に発展させる研究枠組の構築と今後の研究課題および協力体制を検討した。（参加者5名）

### 3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

Pino 教授とは、①民族昆虫学をめぐる近年の動向報告と討論、②地域資源利用に関する民族昆虫学の貢献に関する議論、③日本での現地共同調査による研究視点と方法の共有を実施した。以下では、実施した主な活動について紹介する。

#### ・公開セミナー メキシコの昆虫利用（11月4日）

Pino 教授は、昆虫の多面的利用と研究視点についてはじめに述べた後、メキシコの環境多様性および地域文化の多様性と関連する 545 種におよぶ食用昆虫の特徴を報告した。昆虫の特性に応じた料理方法、栄養価の多角的分析（脂肪、タンパク質、脂肪酸、アミノ酸、ビタミン、微量元素）による昆虫種類の評価と他の食物との比較による生活への位置づけ、さまざまな商品開発の展開と新しいトレンドを詳細に明らかにした。

この発表により、メキシコの多様な自然・自然利用文化への関心が喚起され、また文化現象に対する自然科学的な分析を伴う研究視点が提示され、文化環境学分野の研究方法の発展にたいへん有益であった。

参加者は、本学学生、ラテンアメリカ地域研究者、民族昆虫学研究者、環境教育研究者、昆虫食に関心をもつ一般者など 14 名で、発表に対して、それぞれの関心から活発に質問され、昆虫の食用価値が多面的に議論された。さまざまな昆虫食や昆虫をモチーフにした実物の説明やメキシコの食用昆虫の試食も交えて、実態を深く理解することができた。



上左：発表の様子

上右：質疑応答

下左：水生昆虫卵のクッキー

11月1～3日に日本で昆虫食の盛んな岐阜県において、視察・観察・調査を行い、日本とメキシコの昆虫食文化についての比較視点を得た。

・岐阜県立瑞浪高校における研究会への参加およびイナゴ採り

生物多様性と昆虫食に関して、野中が発表し、それに基づいての討議および昆虫食の実食を行い、食用昆虫としてよく知られているクロスズメバチ・オオスズメバチの生態および料理を実地に観察・体験した。

また、メキシコではバッタの食用が盛んであるが、日本でも代表的な昆虫食であるイナゴの採集を実地に行い、採集地の環境と生息状況および捕獲方法を理解した。



クロスズメバチの巣盤・幼虫観察



イナゴ採り

・串原へボまつりの参加調査

クロスズメバチの巣の飼育および地域イベントとしての昆虫食の活用を、その最大のイベントである岐阜県恵那市串原のへボまつり（へボとはクロスズメバチの方言）に参加し、イベント内容、住民参加、来訪者の状況、昆虫食のさまざまな活用方法およびクロスズメバチ料理を調査した。



蜂の子五平餅



蜂の子抜き出し

・民族昆虫学の研究枠組みと比較研究のための研究会（11月8日）

今回の来日での見聞とセミナーでの発表および討論をふまえて、今後の研究の進め方を議論した。地域性と環境の多様性に留意して地域資源を生かした昆虫食の文化をさらに究明することを目指し、そのためには、産業化と国際市場への展開を地域活性化としてとらえること、そのために昆虫の分類をより精緻に行い、それぞれの特性を明確にすること、生息地の自然条件との関連、文化的利用の多面性を明らかにすることを相互に確認した。

(特記事項) 本学との学術協定(学部間・研究所等間を含む)の締結または既存協定の維持・強化に資する活動を行った場合は、下記にその内容を記載してください。

相手側の研究者相互交流制度を提案いただき、次年度以降にメキシコに招へいされる予定となった。